

第五章 | 詩誌 |

蠟人形



昭和9年7月 西條八十を迎えて 前列中央が岡登志夫、  
左が西條八十、右黒の学生服が太田博（郡商二年）

「カナリヤ」や「鞠と殿さま」（戦後に「青い山脈」

など）で全国に名を知られた童謡詩人西條八十が主宰した詩誌で、昭和五年五月に創刊された。

岡登志夫（丘灯至夫）が西條八十に師事し「蠟人形」の同人となったことから、郡山支部が開設され多くの詩作が蠟人形に発表された。国分伝三、三谷晃一、菊地貞三など郡山の多くの詩人たちが作品を寄せた。

全国から数多の詩人、歌人たちが作品を競い、その結果選に入ることにはなかなか困難であったが、昭和十六年太田博が二十歳の年はほぼ毎号入選し掲載されている。

第九卷第一〇号（一九三八年一〇月）

ふつつつと暖きもの掌ての中に湧き出るとしまた握り見る

選 後 に 茅野雅子評 （抜粋）

鋭い感覚の動きを静にみてゐる。感覚を感覚として細かく味はうとするものであらう。

第九卷十二号（一九三八年）

澁き茶を啜りてをれば其の頃の若き過失にこころはいたむ

第十卷一号（一九三九年）

學校を卒へていく月此の辭書に觸れしことなしそぞろかなしも

第十一卷二号（昭和十五年）

小唄 愛の返信

青い封筒 お便りの  
何時もやさしい み言葉を  
震へる胸に 抱き締めて  
泣いて讀んでた 私なの

<sup>おとめ</sup>  
處女ごゝろの 純情を  
汲んで下さる あなた故  
女と生きる よろこびを  
沁み沁み知った 私なの

戀しい聲が 聞けそうな  
青いみそらに なつかしい  
あなたの<sup>おもかげ</sup>佛 想ってる  
それで嬉しい 私なの

冬がきました 遠からず  
あなたとわたし 二人きり  
楽しい春がくるでせう  
こんど逢ふまで お元気で

小曲 人生旅愁

儚なや

昨日の花薔薇

匂ふと見えし瞬間に

くづれて散りぬ花薔薇

侘しや

穹の虹の橋

かゝる映えしたまゆらに

かき消え失せぬ虹の橋

悲しや

君が黒き眸

恋ふると知りしひとときに

曇りて逝きぬ黒き眸

淋しや

疼く旅愁宿

命と知りしあきらめに

涙し濡れぬ旅ごゝろ。

第十一卷三号（昭和十五年）

小唄 雪夜の櫓歌

忘れた幻

吐息に浮ぶよ

となかい駛らせ

<sup>かよ</sup>通ったこの道

<sup>からまつ</sup>落葉松林を

すべっていったよ。

戀しい倂

臉に沁みるよ

去年のまんまで

變らぬこの道

落葉松ばやしも

粉ゆきけむるよ。

切ない想ひ出

心に<sup>うづ</sup>疼くよ

泣かない 氣持で

雪夜の櫓唄

鈴さへ冷たく

<sup>うつろ</sup>空虛にひびくよ。

別れた戀人

いまさら想ふよ

涙があふれて

うたへぬ櫓唄

鈴さへさみしく

夜穹へ消えるよ。

小曲 くりすますいぶ  
聖誕祭前夜

部屋の扉に鍵かけて  
くりすますいぶ 聖誕祭前夜 ひと ただ孤り  
安樂椅子にもものおもふ。

かたみ 遺品になった ぼいぶる 聖書に  
接吻したらなつかしい  
あなたの唇 くち に觸れるよで。

天に召されて逝ったのに  
泣いちゃいけない氣持でも  
何時か まつげ 睫毛がぬれてくる。

樅に飾った綿雪も  
きん 黄金の くろす 十字架もちかちかと  
瞳にいたく沁みるから。

胸の扉の鍵かけて  
こゝろ さみ 寂しく おもひで 追憶の  
あかり 燈火をそっと とも 灯そうよ

第十一卷四号（昭和十五年）

童謡 飴ちよこの天使

飴ちよこ 飴ちよこ  
可愛いよ 天使よ  
いつでも にこにこ  
わらって ゐるよ

飴ちよこ 天使は  
坊やの おゆめに  
窓から こっそり  
あそびに くるよ

飴ちよこ 食べ食べ  
ちっちゃい 翼<sup>つばさ</sup>で  
星さま きれいな  
お空を とぶよ

飴ちよこ 天使よ  
お菓子の お國へ  
仲よく お手々を  
つないで ゆこよ  
(——康子ちゃんの爲に)



第十一卷五号（一九四〇年）

小曲　ねむれない夜

灯を消せば  
蒼いひかりが　ながれる窓よ

ねむれない  
疼むころに　きのふの夢を

頬埋めて  
白い敷布になみだの痕を

いつのまに  
乳房こひしと　哭いてたぼくよ。

——彼岸、亡母のために

第十卷十二号（昭和十四年）

小品 屋上の秋

青々と山の背が、秋ちかい穹の下で光ってゐた。屋上を吹く風が疲れた敏夫の神経を、か  
るくして呉れるやうに、颯々と、ワイシャ  
ツの汗を冷たくする。営業時間の終る三時半までの加速度的な繁忙をきり抜けると、ほっと  
して、屋上の遠景を楽しむのが敏夫の常だ  
った。

「草野さん、ちょっと」

背後に人の氣配がしたとおもったら、明るい水色の事務服をひらひらさせ乍ら、見る間に  
階段を攀ぢて來た保子、くつくつくつと小  
鳩のやうに笑ふのが、彼女を稚<sup>あど</sup>けない子供らしくした。通風筒の風車がくるゝゝ廻ってゐ  
る。

「秋って、いゝわね、好きだわ・・・」

コンクリートの手摺にもたれて、とまった赤蜻蛉の薄い翅が「へ」の字に折れてゐるのを、  
凝っと見てゐる。

「草野さんの顔が、しんみりして、センチになるんですもの。だけど、詩人なんて嫌よ」  
そして、またくつくつくつと笑ふ。

赤蜻蛉がすいと逃げたと思ったら、少し離れたところにとまって眼玉をぐるぐるさせた。

「保っちょに、詩がわかったら、そうだね、ある歴史が變ったかも知れない」

「そうオ？」本當かしらといふ可愛い眸の底に、敏夫は恐ろしい眞實が秘められてゐる  
やうな凄まじい豫感が、影のやうに自分の心理の中を駛るのを感じた。

（こんな姿勢はよくない）何處かでそんな聲がした。敏夫は不思議な幻覺に溺れて行きたい  
欲望が奔騰することを知った。

「歴史って、をかしなものね」

「うん、嘘でいっぱいなんだ、本當のやうな嘘で。保っちょも人の言ふことなんかうっか  
り信用できないんだよ」

敏夫は保子に言つてゐるのか自分に言つてゐるのか分らなくなった。そして通風筒の風  
車も廻らない、かたい階段をだまって駆け降  
りて行つた。心の隅の方へ崩れてゆく小さな感情を追ひかけるやうに――。

小曲 待ちぼうけ

戀ごゝろの 逢たさ故に  
人目忍んで 來たものを  
待ってゐる身の 切なさつらさ  
何故にあの人 遅いやら。

月夜ざくらの 花散る下で  
きつと逢ひましょ 待ってまど  
愛の指きり 誓<sup>ちか</sup>った言葉  
胸に抱きしめ たゞすまひ。

待てど暮らせど いとしい人は  
何處で浮氣を してるやら  
募<sup>つ</sup>る想ひに いつしか燃える  
淡い嫉妬の やる瀬なさ。

こんな氣持も 知らない癖<sup>くせ</sup>に  
さんざちらせて 待ちぼうけ  
口惜<sup>くや</sup>し涙の 臉のうらに  
うかぶ戀しい 憎いひと。

第十一卷七号昭和十五年八月号

小曲 虹のゆめ

あのところ

あのをか とほ香い日の

だあれも

知らない 虹のゆめ

まなうら

うかぶよ なゝいろの

なみだに

ぬれてる 虹のゆめ

おもへば

せつない まぼろしも

はるかな

あのそら 虹のゆめ

石

黙ってゐる石

黙ってゐる石

億年を刻んだ歷程を截れば  
脊椎動物の呻きが流れるであらう  
血液のやうに。

黙ってゐる石を ひっくりかへせ  
下から哺乳類の骨盤が  
白い化石となって  
發掘されるかも知れない。

石は眇だが  
射すくめるように眼を据える  
黙つたまゝで  
黙つたまゝで。

### **蠟人形の家**

★夏も終りに近く心なしか涼しいあともすふいあを感じる。草深い東北のかたすみで詩を愛する少年が、全国のR誌黨にお呼びかけします。毎月待ち遠しい此の誌華集、若い詩人の息吹がわたしのせいしゅんに虹をあたへる。しんじつ、詩を愛し續けてゆかうといふお友達よ、詩情溢れる音信を待つ。小樽へ行った三谷晃一兄よ、春信、童話、聖なる手、あの頃の詩作時代が懐かしい。月、菊地、萩原の諸氏、傑作を發表されんことを。（郡山谷玲之介）

【注・R誌黨一詩誌「蠟人形」同人を指す。月一月照美、菊地一菊地禎三、萩原一萩原みち、三人はいずれも詩誌「青空」「蠟人形」同人で福島県在住】

詩 ましろき卵

淋<sup>きび</sup>しきときは ゆふぐれは  
ましろき卵<sup>たまご</sup> 掌<sup>て</sup>にとりて

灯<sup>ともしび</sup>ちかく すかし<sup>み</sup>見つ  
春<sup>はる</sup>けき夢<sup>ゆめ</sup>に あこがるゝ

佳<sup>よ</sup>きあてびとの おもかげを  
ましろき殼<sup>から</sup>に祕めたれば——。

第十二卷七号昭和一六年七月号（一九四一年）

七月号推薦 七人集（詩）

挽 歌 （なき愛星兄にさゝぐ）

谷 玲之助

紅い蠟燭の<sup>もえがら</sup>燼<sup>て</sup>を掌に  
星の座をいつこへ  
きみは歩み去らうとするのか

なゝいろの夢にひとみを染め  
もはや見えざるものの  
聖なる<sup>しぶき</sup>飛沫を浴び 濡れつゞけては

くちびるに地上の<sup>きび</sup>歌寂れ  
いまだ聴かざりし深韻の諧調が  
きみの<sup>あのと</sup>覺音にこもる  
肉體の砂礫となるまで

紅い蠟燭の<sup>もえがら</sup>燼<sup>て</sup>を掌に  
きみはためらひなく歩み去る  
永劫に癒えざる不眠の國へ

【愛星兄一詩誌「蠟人形」同人、中将愛星  
昭和八年から十三年にわたり作品が掲載されている。  
昭和十六年逝去】



小曲

西條八十選

春の愁ひ

谷 玲之介

(きくち・ていぞう兄に)

灰かに月の 蒼ければ  
離りし夜の まぼろしを  
胸に擁<sup>いだ</sup>きて 哭かまほし

咎めたまひそ かりそめの  
若き誤<sup>あやま</sup>ち かへりみつ  
ああ狂ほしき わが想ひ

ひとたび往きて かへらざる  
青春愁ひ 多ければ  
今宵は月を 哭かしめよ

【菊地貞三一「蠟人形」郡山支部同人一太田の二年後輩の三谷晃一が

安積中学一年生

の菊地を誘って同人とした。三人は「北方」「蒼空」「蠟人形」詩誌上で詩作を競い合い、

その才能を磨くとともに友情を深めて行った。平成二十一年逝去】

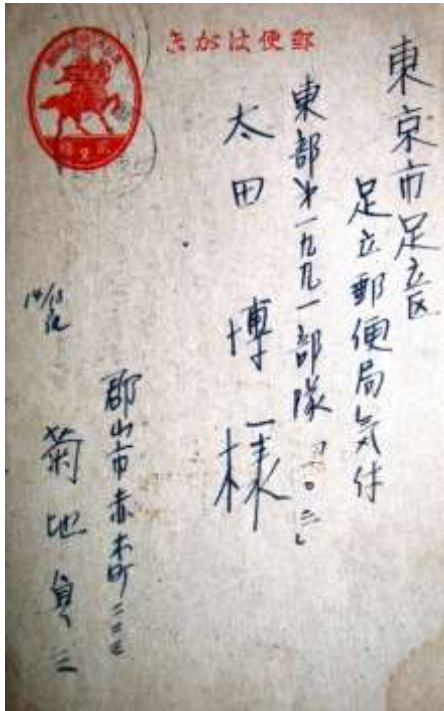
★どつじん・ためしぎり・おんぱれいど★

三谷晃一解剖抄

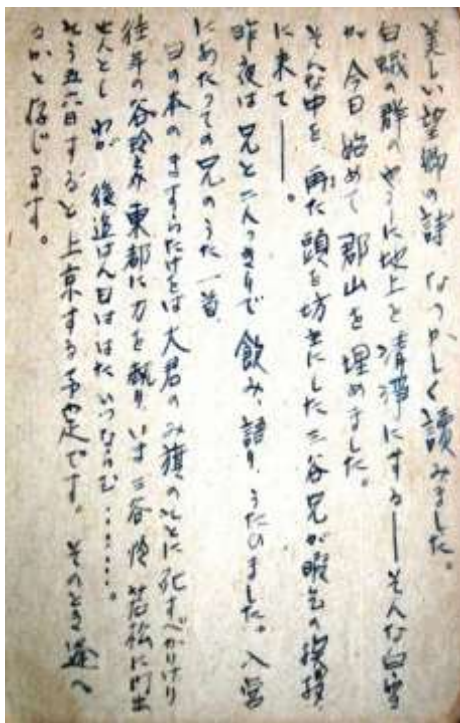
谷玲之介

彼のいめえちは象徴の世界を彷徨してゐる美しい白蛾であらう。詩神の祭壇に煌やく聖燭に翅を灼きながらなほはばたく瞬間を忠實に真摯に捕へてゆこうとする。抒情の率直な表現から象徴詩へ突っ込んでゆく逞しい意欲が最近の詩篇には顯著である。彼の澄んだ内的燃焼の高度を示す作品は「紅鸚哥」「無限」「童話」等であらう。さもあれ詩の天地鈴蘭の國北海道で猶一層靜かに詩作させたい。

「蒼空」昭和十五年八月号



入営中の太田宛てに菊地貞三が送ったはがき。三谷晃一の入営と送別会の模様が記されている。「白蛾」は詩誌「蒼空」で太田博が三谷に送った言葉を引用したものであろうか。



墓 碑 銘

うづめよ<sup>おちば</sup>落葉 若<sup>わか</sup>き日<sup>ひ</sup>の  
愛<sup>あいし</sup>知りそめし 人<sup>ひと</sup>の名<sup>な</sup>を。

つもれよ<sup>こゆき</sup>粉雪 わが<sup>ほ</sup>頬<sup>ほ</sup>の  
熱<sup>あつ</sup>きなみだ<sup>な</sup>の 凍<sup>こほ</sup>るまで。

かくては<sup>はる</sup>春<sup>はる</sup>も めぐるころ  
名<sup>な</sup>なき<sup>あれくさ</sup>雑<sup>を</sup>草<sup>を</sup> 生<sup>な</sup>ひいでむ。

ひらけよ<sup>ち</sup>小<sup>ち</sup>さき<sup>さき</sup> 花<sup>はな</sup>をもて  
未<sup>みくわん</sup>完<sup>し</sup>の詩<sup>し</sup>句<sup>く</sup>を 刻<sup>きざ</sup>ましめ。

【六月に徴兵検査を終えて、間もなく入営通知が来ることが予想された。

死を懸けて戦うことになるであろう軍隊に入るに際して、これまでの人生を振り返って覚悟を深めた作品と思われる。未完という言葉は沖縄での「剣と花」にある最後の詩「未完」と響き合って、太田博の終生のテーマとなった。】

第十二卷十号（昭和一六年十月号）

詩 <sup>かま</sup> 蝟 <sup>きり</sup> 螂

谷 玲之輔

<sup>ちの</sup> 斧ふれ  
<sup>ちの</sup> 斧ふれ <sup>かまきり</sup> 蝟螂よ

<sup>くる</sup> 眩めく <sup>なつ</sup> 夏の まひるまに  
まどろむ <sup>こてふ</sup> 胡蝶 <sup>せみ</sup> ねむる 蟬

<sup>ちの</sup> 斧ふれ  
<sup>ちの</sup> 斧ふれ <sup>かまきり</sup> 蝟螂よ

花に <sup>やす</sup> 憇らひ <sup>みつ</sup> 密を <sup>こ</sup> 慾ふ  
むなしき <sup>ゆめ</sup> 夢を <sup>こぼ</sup> 毀つまで

【注・ここで谷玲之介から、玲之輔とペンネームが代えられている。】

第十二卷十一号（昭和一六年十一月号）

詩 鎮 魂 歌

谷 玲之輔

朔風<sup>きたかぜ</sup>を われは愛せり  
かるがゆゑ  
わが奥津城<sup>おくつぎ</sup>は 樹<sup>じゆひよう</sup>氷<sup>ひ</sup>の碑  
雪の花<sup>いろど</sup>粉に 彩れよ。

愚かにて 醜<sup>みにく</sup>きものゝ 遺したる  
阿呆なる歌 くちずさみ  
落葉散らせよ  
逝<sup>ゆ</sup>きし<sup>ひ</sup>日は。

——さはあれど  
ああ 聴<sup>き</sup>かざらむ 耳なきは  
わが終るなき 猛<sup>たけ</sup>き聲  
吹雪<sup>ふぶき</sup>捲きつゝ 天<sup>あまか</sup>翔くる。

小曲 酸漿

谷 玲之介

あをく染<sup>そ</sup>みたる くさのつゆ  
はなほほづきに ほのほふ  
ももわれがみの のこり<sup>か</sup>香よ

なつのゆふべに なぐさみし  
いとけなきうた こもるがに  
はなはいだきぬ まろき<sup>み</sup>實を

すぎしむかしの をさなどち  
きみに<sup>に</sup>肖たれば ほほづきの  
うすべにいろに くちづけむ

【注・再びペンネームは谷玲之介に戻っている】

第十二卷十二号（昭和十六年十二月号）

## 獻 詩

（いまは亡き詩人ちもんに）

夢も<sup>ねが</sup>希ひも よろこびも  
落葉とともに 散りしきぬ

なべて<sup>はかな</sup>儚き あくがれは  
粉雪とともに 散りしきぬ

萬象<sup>ものみなこゑ</sup>聲を うしなひて  
涙するとき 咽ぶとき

樹氷は咲きて 終るなき  
きみの詩<sup>うた</sup>をば 象<sup>かたど</sup>らむ

【注・ちもん—山崎智門—蠟人形同人、昭和十六年二十六歳にて逝去】

戦時歌謡

來たぞ國民徴用令

谷 玲之介

來たぞ見てくれ 待ちかねた  
晴れの 國民徴用令  
君の御楯と 戦場で  
銃をとるのぢや ないけれど  
かたい覺悟は 變りやせぬ

戦地の友よ 案ずるな  
彈丸も戦車も 飛行機も  
及ばず乍ら 引きうけた  
日頃鍛へた この腕に  
物を言はせて 頑張るぞ

唸る<sup>モーター</sup>發動機 ちる火花  
戦場で死なう その意気で  
赤誠<sup>まじろ</sup>こめる 槌の音  
勝って勝ち抜く 底力  
汗と油で 造るのだ

こゝろ澄ませば 皇軍の  
あの勝鬨が きこえる  
やるぞ負けぬぞ しっかりと  
名譽の 國民徴用令  
掌に握りしめ 誓ふのだ



詩よあけ

谷 玲之輔

つめたい<sup>ひかり</sup>光芒！ ひかりがこんなに滾々と  
湧くうつくしいよあけだ。

裸だけれども、眞實な樹木の呼吸<sup>いぶき</sup>はよろ  
こびにふるえて。

とりたちよ、わたしの歌をうたっておくれ、  
俵せはやってきた、と。

けふもあいするものゝために、わたしは  
生きはじめる、

髪の毛までめざめ、肺のなかへ<sup>ひいやり</sup>爽涼と聖  
らかな朝の挨拶——。

**郡山支部五月例会豫告**

と き・五月六日（土）午後六時  
と ころ・西山花店内岡宅  
か い ひ・五拾銭（當夜持参）  
じ さ ん・R O 誌五月號

郡山市清水臺九十八  
蠟人形郡山支部  
岡 登志夫

「蠟人形」第十一卷四号に掲載された

郡山支部例会の予告（昭和十五年五月）

【注・昭和十七年一月に軍隊に入営しており、  
この詩は入営前の最後の入選作品となった。】